

鮭のすばしり（素走り）は、雪の降る季節の前に河原などで見られる現象である。鮭は網に追い詰められたり人間に追われたりなどして、水から飛び跳ね出て河原へ上り、網が張ってある場所を飛び越えて再び水へと飛び入ることで、網を回避するのである。この時、大きな鮭が先頭に進んで水から飛び離れると、近くにいる小さな鮭などがその後が続いて上り、河原を疾走する距離は四〜五間（約七〜八メートル）に過ぎないけれども、まるで射放たれた矢のようであって、人間の足の速さでも追いつくことはできない。先頭を進む大きな鮭が、もし何かの障害物に引っかかって横に倒れた時は、そのあとに続いていた鮭も同じように倒れて二度と起き上がらず、人間が捕まえるのを待っているかのようなのである。（そのため）思いがけず、手も濡らさずに二〜三匹の鮭を手に入れることがある。これらは足がないのに陸地を走り、転倒すると二度と起き上がらないなど、魚類の中で比べることでできるものではなく、奇妙な魚と言うべきである。

ある人が、若狭の小浜（現在の福井県小浜市）で、子供が四、五人集まって、亀を一匹捕まえて叩き殺そうとしているのを、この人が通りかかり、子供たちをなだめて、亀を買い取って海へ解き放ってやったのだ。あるとき、この人が商売のために、北陸地方へと向かっていったのだが、そのまま小浜から船に乗ったのだ。ちょうどそのとき風が激しく吹き、まさしく船はひっくり返ってしまったのだ。水夫をはじめとして、船の中の人々五十〜六十人は、海の藻屑となってしまった。

そのなかでも、例の亀を助けた人だけが、ただ一人だけ無事に残って、何の問題もなく、対岸までは一里（約四キロメートル）ほどもあるだろうと思われる港へ、滞りなく平らな陸地を進むかのようにして、難なく波打ち際へと上りついたのだ。しかしながら（男は）不思議な思いがして、通ってきた後ろを振り返って見ると、亀たちが数千数万という数も分らないほど無数に、甲羅を隙間なくびったりと岸際まで並べ連ねて、（男を乗せて）ずっと一続きに並んでいたのだ。さては、亀が私を助けてくれたのだなあ」と嬉しく思っ、小浜で亀を一匹助けたことを思い出して、その恩恵のありがたさをしみじみと感じたのだが、（この話からも）人間で恩義や道理を知らないような者は、虫や動物にさえ遥かに劣っているのだと知るべきである。この話は、若狭の人が語ったことである。明暦年間（一六五五〜一六五八年）の頃の出来事である。